

過去/現在の動的調停
-ローベルト・シンデル『生まれ』論-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2019-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福間, 具子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19963

過去／現在の動的調停

—— ローベルト・シンデル『生まれ』論 ——

福 間 具 子

はじめに

ホロコースト生還者のうち最も若い者でも70歳を超える今日、加害者側を含めても、実体験を語り得る者の数は日々減少の一途をたどっている。それに従い、ホロコーストの記憶は家族間などの直接的コミュニケーションの中で伝達されるものから、もっぱら記念碑や博物館、書籍や映画や記念行事などを通じて間接的に伝えられるものへと変容しつつある。—こうした流れの中、1980年代頃から、直接の体験者の子どもに当たるいわゆる「第二世代」が文学作品を通じて両親の過去と自らの関係を語り始めるようになった。社会においてホロコーストの記憶が集散的、抽象的なものになっていったこととは異なり、当事者の子どもたちの生は、依然として先行世代のトラウマに直接的に巻き込まれ、蝕まれ続けていることがそこで明らかとなった。

父をダッハウ強制収容所で殺害され、母もアウシュヴィッツの生還者である1944年生まれのアウシュヴィッツ在住のユダヤ系作家ローベルト・シンデルの長編小説『生まれ (Gebürtig)』⁽¹⁾ (1992) は、そうした第二世代ホロコースト文学の代表作と言われている。80年代のウィーンを主な舞台に、ホロコースト被害者の子ども世代が加害者の子どもや非ユダヤ人たちと相互に関わり合い対話を交わすこの作品は、過去のトラウマ的記憶が現在をどのように呪縛してしまっているかを如実に物語っている。もっとも、本作の持つ重要性はしばしば指摘されるものの、複数のあらずじが絡まり合うストーリーの難解さや、詩人でもあるシンデルの晦渋な文章表現が、長い間主題の核心を捉えることを妨げてきたことは否めない。ドイツ語圏における研究でも、当初は物語の筋立てを考察対象とし、80年代ウィーンにおいてなお困難なユ

ダヤ人／非ユダヤ人の関係を描いた物語と見るものが大勢を占めていた⁽²⁾。だがその後25年を経て、シンデル作品研究、ホロコースト第二世代文学研究、記憶論の深化を背景に、本作の持つ意義も一層精緻に捉えられるようになりつつある。日本国内では、2000年のシンデル来日を契機にいくつかの包括的研究が発表されたが⁽³⁾、それ以後、おそらく翻訳の難しさが大きな要因となり、研究が足踏み状態となっている。ゆえに本論では、欧米での研究の成熟に多くの助けを得ながら、世代を超えたホロコーストの記憶の移行—〈ポストメモリー〉—の問題と関連付けつつ、より深層に踏み込んだ作品分析を試みたい。

1. ポストメモリーの文学—『生まれ』概略

すでにエリ・ヴィーゼルの作品の頃から、ホロコーストを題材とした文学作品においてはそこに描かれている出来事が真実であるか否かが常に関心の対象となってきた。ホロコーストという未曾有の大虐殺が「語りえぬもの」であるとされればされるほど、プリーモ・レーヴィら実際の生還者の語る証言に特権的地位が与えられ、虚構を用いることはしばしば禁忌の侵犯と見なされた。ホロコースト言説群における重要な価値の尺度が記憶の真正さであるならば、実体験を持たない第二世代の作品はホロコーストの記憶に対して何も寄与しないことになるが、そもそも彼らは親世代の体験そのものを再構築しようとはせず、むしろ自らの生きる現在を舞台に、そこに影を落とす背景としてホロコーストの過去を描いている。彼らの作品は、ホロコースト文学の系譜からは切り離し、別の範疇に入れるべきものなのだろうか。—ホロコースト文学研究者ロバート・イーグルストンや自らも第二世代の作家エヴァ・ホフマンらは、両者の間には断絶ではなく連続性があると考えているが⁽⁴⁾、その際に援用しているのが、英文学者マリアヌ・ハーシュの提示した〈ポストメモリー〉という概念である。

“Postmemory” describes the relationship that the “generation after” bears to the personal, collective, and cultural trauma of those who came before – to experiences they “remember” only by means of the stories, images, and behaviors among which they grew up. But these experiences were transmitted to them so deeply and affectively as to *seem* to consti-

tute memories in their own right. Postmemory's connection to the past is thus actually mediated not by recall but by imaginative investment, projection, and creation. (強調は原文)⁽⁵⁾

「ポストメモリー」とは、先行世代の個人的、集合的、文化的トラウマに対して「後の世代」が持つ関係性、そしてもっぱら物語やイメージ、および成育過程で見聞きする振る舞いを通して彼らが「記憶する」経験に対して持つ関係性を表している。しかしこれらの経験は、彼らにあまりに深く、心を揺さぶるように伝わったため、それが当然にも自分自身の記憶を成すかのように思われてくる。ゆえにポストメモリーの過去との繋がりは、実際には想起ではなく、想像を働かせること、投影、そして創造によって媒介されている。

ハーシュは、「後の世代」もまた、記憶の媒介物（体験談、写真、文学作品等）を通して過去に接続するうちに、深く心を動かされ、結果彼らの中に実際の記憶めいたものが形作られてゆく現象を指摘している。この記憶は、完結した過去の出来事についての知識を得ることによってではなく、あたかも自らが当事者であるかの如く、トラウマ的記憶の磁場へと巻き込まれてゆくことで生まれるものであると言える。イーグルストーン等は一樣に、第二世代がこのポストメモリーの領域の中にあることを強調する。だが、想起による記憶ではなく、想像や自己投影によって創出されるポストメモリーは、真実でも妄想でもない、ホロコーストの何を想起するのだろうか。

シンデルの『生まれ』には、ポストメモリーに支配されているような人物が多数登場する。それぞれが、親世代の体験に自身のアイデンティティを揺さぶられ、様々な方法で乗り越えようともがいているが、そこには作者シンデル自身の親世代の記憶との格闘も見え隠れしている。この20名以上にのぼる人物が登場する複雑な物語を、ここでは作者の自伝的要素と関連付けながら概略してみたい⁽⁶⁾。

『生まれ』の一人称の語り手となっているのはダニエル・デーマントとアレクサンダー・デーマントというユダヤ人の双子の兄弟である。二人は、母親以外の親族をマウトハウゼン収容所で亡くしたホロコースト第二世代として、80年代のウィーンに暮らしている。アレクサンダーは、アレクサンダー・グラフィート（作中ではザーシャとも称される）という筆名の作家であり、この物語の作者とされ、ダニエル（作中ではダニーと称される）の行

為を書きとる役割を果たしている。ダニーは出版社の原稿審査委員として、ある作品の審査を行っている。この兄弟はそれぞれ恋愛関係を抱えていて、それが物語の主要な筋のひとつをなしている。まずダニーはオーストリア人の女医クリスティアーネ・カルタイゼンという女性とあるパーティで知り合い、恋に落ちる。彼女は下部オーストリアのリーリエンフェルト出身で、父親は地方警察官で中道右派政党オーストリア国民党の地区書記長をしていたとされ、保守性が暗示されている。彼女は夫と別れたばかりで、二人の幼い娘と暮らしている。ダニーとクリスティアーネは、都会人／地方出身者、ホロコースト犠牲者の子孫／保守的なキリスト教徒の家庭育ちなど、様々な点で異なっており、互いに惹かれ合いながらも折に触れ対立する。他方アレクサンダーは、ユダヤ人の父と非ユダヤ人の母を持つマーシャ・ジンガーを愛し続けている。マーシャはダッハウ強制収容所解放後に事故で死んだ父の方に強い愛着を感じ、ナチスに加担した罪を軽視する戦後生まれのオーストリア人たちへ怒りを感じている。そして、反動でシュタイアーマルク出身の素朴な青年と交際するが、彼の家族との生活のストレスから強い酒を飲み大腸潰瘍になって入院する。アレクサンダーは彼女を献身的に支えるが、彼女はその愛に応えてくれない。

この双子の兄弟において興味深い点は、作中においてダニーが行為者であり、アレクサンダーがその書記であるという役割分担が行われている点である。第一章冒頭は次のように始まる。

Wenn links und rechts kein Platz ist. Von oben tropft's, von unten sprudelt's. Geh halt einen Weg. Aus dem Rücken kommt Geplärr, vor dir lauern bloß die Gedanken, die du selbst abgesondert hast. Aber schreiben, Alexander Graffito. Immer den Leuten hintennachschreiben: (G.17)

左にも右にも余地がないならば。上からは雫が滴り、下からは湧き出てくる。ともかくひとつの道を行け。背後からは泣きじゃくる声が聞こえ、お前を待ち受けているのは、お前自身が切り離した思考だけだ。しかし書くのだ、アレクサンダー・グラフィート。とにかく人々の後から書くのだ。

詩的で難解な表現だが、ここで語られているのは感情からも理性的思考からも意識的に自己を切り離し、純粋な記録装置として人々の行為を書き記そうとするザーシャの姿勢である。作中では、双子の兄弟に、行為者／記録者、

現在／事後という役割がそれぞれ与えられており、そこには作家自身の内面の分裂状況が現れていると見る事が出来る。両者はしばしば互いに相手の生への態度を羨望し、ダニーは「なぜ俺は弟アレクサンダーのように嘆きを書き記さないのだ？彼にはあらゆる失望が文学的出来事となり、彼はただ怒りのみから偉大な詩人へも成長するのに。日記を書いても何の役にも立たなかった、アレクサンダーの感じる満足は俺の中には全くなかった。」(G.19)と嘆き、アレクサンダーは「俺はこんなにもマーシャに会いたい、自分自身で何かしたい、自分の生を生き、もはや何一つ後から書き留めたくない。(中略)出来ることなら、テキストを自分の体から引き剥がし、裸のまま自分自身の生の中へ駆け込みたい。」(G.235)と行為することを熱望する。

この分裂状態は、共産主義者であった母の影響下で育ち、青年期には新左翼活動家としてウィーンの学生運動を主導してきたシンデルが、70年代後半に政治活動を止め、作家生活に入ったことを想起させる。自ら出来事に没入し行動することと、出来事を事後的に冷静に記録することの、それぞれの重要性と限界が作家が熟知していたことは十分推察される。しかし、他方でこの分裂状態は、第二世代の抱える葛藤としても解釈できる。体験者たちの恐怖、苦悩が表象不可能とされるのにもかかわらず、第二世代は痕跡が消えてしまったはならないという強迫観念に縛られ、意味づけを保留にしたまま記憶—それはポストメモリーとなる—を保持する役割を負わされている。しばしば引用される、ダニーのアレクサンダーに対する「お前は後から書き取っている、素早くかつ正確に。なぜなら痕跡は残らないと残らないからだ。(傍点引用者)」(G.17)というセリフに第二世代としての役割意識は現れているが、他方で「お前の書くものに本当のことは何一つない、ザーシャ。」(Ebd.)というダニーの皮肉に第二世代の限界に対する諦念も垣間見える。作中において、この分裂が完全に解消されることはないが、冷静な書き手としてのアレクサンダーの自我はダニーの感情の嵐の影響を受け、徐々に解体してゆく。

第二の主要な物語の筋は、ニュルンベルク裁判で死刑判決を受けたナチ高官エルンスト・ザックスの息子コンラート・ザックスを巡る物語である。—コンラートは架空の人物だが、そのモデルが実在人物であるニクラス・フランクであることは周知の事実となっている。ニクラスは父はナチ高官でポーランド総督を務めたハンス・フランクであり、ワルシャワ・ゲットーの担当者でもあり、彼の指揮下で、200万人近いユダヤ人がベウジェッツ、ソビブル、トレ布林カの絶滅収容所に送られたと言われている。戦後はニュルン

ベルク裁判で戦争犯罪と人道に対する罪により死刑判決を言い渡され、46年10月に絞首刑となっている。その実の息子であるニクラスは、父の処刑当時7歳であったが、のちにジャーナリストとなり、1987年に『父、その決着』⁽⁷⁾という著書を出版しセンセーションを巻き起こした。『生まれ』では、コンラートはニクラスとほぼ同一の経歴で描かれ、「ポーランドの王」と呼ばれたポーランド総督の息子で、当時は「ポーランドの王子」と呼ばれ、成人したのち、ハンブルクで文芸誌編集者をしていることになっている。コンラートは仲睦まじい妻エルゼには自らの過去を隠し陽気な人物として暮らしていたが、ある頃から悪夢にうなされ、良心の呵責に苛まれた結果、妻の元を去り、ユダヤ人への贖罪を求めてミュンヘンやフランクフルトをさまよう。彼は以前知人宅で知り合ったユダヤ人のエマヌエル・カツに会おうとし、カツを通じてダニーに出会う。病的に贖罪を求めるコンラートは、冷淡に彼と接するダニーとともにドライブをしている最中事故を起こし、「またユダヤ人を傷つけてしまった」と感じる。重傷を負い入院したダニーの元を訪ねてきたクリスティアーネに説得され、コンラートは父親についてすべてを告白した本を書くことを決意する。

80年代に加害者側の第二世代が注目を集めるようになって以来、その代表格であるニクラス・フランクはドイツ語圏では有名な存在であり、父親についての回想記を書くという共通点からも、読者がコンラートとニクラスを即座に同一視することは想像に難くない。しかし、コンラートが果たす役割は、作品にリアリティを与えるためというよりも、作者が加害者側の子孫の内面を理解しようと試みたからではないかと思われる。ポストメモリーが、記録や物語を媒介に想像力を働かせることで喚起される記憶であるならば、被害者の子孫が加害者の子孫へと擬似的に同一化することも不可能ではない。この点については後の章で詳しく考察する。

第三のあらすじは、作中でエマヌエル・カツの書く記録文学作品として粹物語の形で描かれるヘルマン・ゲビルティヒの物語である。ゲビルティヒは、ウィーンのユダヤ人弁護士の息子で、10代の頃にエーベンゼー収容所を経験し、戦後ニューヨークに移住して喜劇作家として成功した50代の人物として描かれる。彼は両親を収容所で殺害され、戦後過去の罪過を認めようとしなかったオーストリアを心の底から憎悪し、二度とその地を踏みたくないと考えている。しかし、エーベンゼーの看守であったアントン・エッガーが、アルベルト・アイグラーという偽名を使って一般市民に紛れて生き延び、逮

捕されたもののエグガーであることを否認し続けている裁判で、アイグラーがエグガーと同一人物であることを証言するよう求められる。彼に証言を依頼するのが、ズザンネ・レッセルというオーストリア人女性である。ズザンネの父カール・レッセルは、共産党員で政治犯としてエーベンゼーに収容されていた過去を持つ。彼はアルプス登山中にエグガーを目撃し、そのショックで心臓発作を起こし亡くなる。父の無念を晴らしたいズザンネは、エグガーがかつて「頭蓋割り」と呼ばれ恐れられた人物であることを証言してくれる人物としてゲビルティヒの存在を知り、ニューヨークへ赴き彼を説得する。自らの意志で抵抗運動を行い収容された政治犯と、何の罪もないまま収容されたユダヤ人では全く事情が異なるとゲビルティヒは激しく拒絶するが、最終的には説得を受け入れ、ウィーンで証言台に立つ。

世界的に有名な作家であるゲビルティヒがウィーンを来訪するということで、ウィーン市長は勲章を授与し、大々的なセレモニーを企画するが、ゲビルティヒはその偽善に嫌悪感を抱く。しかし裁判は失敗に終わり、エグガーは無罪放免され、ゲビルティヒは「ウィーンはウィーンのままであった」と絶望し、ニューヨークに帰還する。彼の物語は、永遠にさまよい続ける者としてのユダヤ人像を体現していると言える。

ここで指摘しておきたいのは、ゲビルティヒの物語に埋め込まれた作者シンデルの自伝的要素である。シンデルの両親はオーストリア共産党員であり、スペイン内戦にも国際旅団の一員として参加し、ヒトラー政権時には秘密工作員として反ファシズム運動に身を投じていた。リンツに抵抗拠点を作るために偽名を使い潜入工作を行っていた際に両親ともにゲシュタポに捕えられ、父はダッハウで命を落としている。父の経歴は、収容所時代まではズザンネの父カールとほぼ一致しており、ズザンネはシンデルの分身のように予測されるが、作中でカールとズザンネ親子はユダヤ人ではなくオーストリア人と設定され、ユダヤ人という出自の要素はむしろゲビルティヒに仮託されている。作者の父親に対する感情は恐らく、父の無念を晴らしたいという点ではズザンネに託され、政治的信条から命を落とした者に全面的同情は出来ないという点ではゲビルティヒに託されており、葛藤があることがうかがえる。

—これら三つの主要な筋が絡み合い、一つの全体を成しているのが『生まれ』という作品である。プロローグとエピローグの間に七章が挟まれる構成になっているが、各章はさらに短い複数の物語に分割され、上記三つの筋が寸断されて入れ替わり語られる。物語の断片化は、絶えず視点の相対化と時

間軸の多元化をもたらしている、レナーテ・ポストホーフェンはこの状況を、歴史的出来事の真の構造と捉え、「非同時性の同時性 Gleichzeitigkeit des Ungleichzeitigen」と呼んでいる⁽⁸⁾。

ポストメモリーもまた、過去と現在が共在し、他者の視点が自己の視点に介入する「非同時性の同時性」の現象である。本作はそれをどのように表現し、その先に何を見出そうとしているのだろうか。次章から、作品に沿ってその問題を追ってみたい。

2. 対話

あらすじからは、ダニーやアレクサンダーの恋愛関係の帰結、あるいはゲビルティヒが証言するエグガーの裁判の結末に物語の焦点があると推察されるに違いない。しかし実際の作品では、そうした場面はごくあっさりと言及されるに過ぎず、大半の部分は登場人物たち、それも主要な筋には関わらない多数の人物たちが交わす対話や彼らの内的独白で構成されている。その点が、この小説がしばしば「ポストモダン」的と称される所以である⁽⁹⁾。例を挙げると、ザックス夫妻の知人で奇抜な演出で知られる演出家ペーター・アーデルがペーター・ヴァイスの『追究』を演出することに関して夫妻と会話を交わす場面や、クリスティアーネの二人の娘にダニーが自作の物語を聞かせる場面、あるいはエマヌエル・カツツがアウシュヴィッツ生還者である老齢の母を見舞い、集まった親族との会話に苛立つ場面などである。これらは多かれ少なかれホロコーストの歴史との関連を含んでいるものの、伏線としてその後の展開に回収されることなく散逸してゆく。

このような場面のほとんどが、相互に理解し合うことのない登場人物間のかみ合わない対話として展開されているが、むしろこれら断片的対話群の星座コンステラツィオーンが本作の最も注目すべき特徴のひとつであるため、いくつか例示してみたい。エマヌエル・カツツと知人宅で初めて会ったコンラート・ザックスが、カツツが小説を書いていると紹介されて興味を示す。会話は以下のように進む。

„Worüber schreiben Sie denn, sind Sie Schriftsteller?“ Sachs äugte zu Else hinüber, befremdet, wie gut die sich mit der Neuen bereits arrangiert hat.

„An sich arbeite ich in einer Bank“, antwortete Katz.

„Aha“, meinte Sachs. „Die Schriftstellerei betreiben Sie also als ein Hobby oder so ähnlich?“

„So ähnlich“, sagte Katz. „Privat. Ich bin ja auch bloß privat ein Jude.“

Sachs fuhr zusammen. „Was? Wie? Verzeihung, was sagten Sie?“ (G.113) 「何についてお書きなんです、作家でいらっしゃるんですか。」ザックスは、エルゼにひそかに目をやり、彼女が初対面の女性とすでに上手くやっていることを怪訝に思った。

「本来は銀行勤めです」とカッツは答えた。

「そういうことですか」とザックスは言った。「文筆業はつまり趣味か何かでなさっていると？」

「そのようなものです」とカッツは言った。「プライベートで。私はまた、プライベートだけでユダヤ人なんです。」

ザックスはぎょっとした。「えっ？何ですって？すみません、何と仰いました？」

ザックスの困惑を見て取り、カッツはドイツ人の前で「ユダヤの星を付けてみせることの狂気じみた悦び」(G.114)を感じる。緊張した空気を解こうとする他のドイツ人たちとは異なり、良心の呵責に苛まれているザックスは今日でも「正常化はしていない。罪と無実しかない」(G.115)と述べ、加害者の子孫である自分は有罪であると感じる。

社会生活においてはドイツ人とごく普通に共に働き友人関係を結びながら、「プライベート」ではユダヤ人であると告白し相手を当惑させるカッツの歪んだ内面と、過剰なほどに罪責感情に支配されているザックスの卑屈さが、この架空の対話で一瞬照らし出される。被害者の子孫と加害者の子孫のこの邂逅の場面は、かつての力関係を脱構築し、善悪の区別を宙づりにする効果を発揮していると言える。

その後再びザックスはカッツと会い、謝罪しようとするが、カッツは率直に語る事が出来ず、受け流すような態度を取ってしまう。そして「この対話は全く自分の手には負えない。」「ドイツ人は真実を語り、ユダヤ人が嘘をついている。」(G.128)と内心で後ろめたさを感じる。ザックスがその後も面会を求め続けたにもかかわらず、カッツは彼を避け続け、作中で両者に真の宥和が訪れることはない。

このように、内容上は重要でありながら更なる展開を見せない対話の場面

は他にも多数散見される。次に引用するのはダニーとクリスティアーネの会話の場面である。クリスティアーネは救急医であり、カツツの母でアウシュヴィッツを生き延びたアマーリエの診察もしていた。アマーリエは亡くなり、ダニーがその死を悼んでいる。

„Emanuel spricht dauernd vom verspäteten Auschwitztod“, sagte er und nahm das Kleid vom Sessel weg.

„Mir hat er das schon gesagt, da war sie noch gar nicht tot.“

„Das kommt vermutlich von seinem Manuskript.“

„Ja, er wirkte etwas überspannt“, sagte sie, zog sich den Pullover über den Kopf und warf ihn auf den Schreibtischsessel.

(…)

„Ich bin dauernd vom Tod belästigt“, sagte sie und spazierte nackt zur Tür. „Kaum hängt sich wer auf, werde ich gerufen. Ihr erinnert euch ständig, redet von Auschwitz, aber ich seh das Sterben tagtäglich. Ich habe genug. Kannst du nicht von was anderem reden?“ (G.199f.)

「エマヌエルはずっと、遅きに失したアウシュヴィッツの死について話している」、と彼は言い、ワンピースを椅子から片づけた。

「それは私にも言ってたわ、彼女はその時まで全然死んでなかったのに。」

「おそらく彼の書いている原稿が原因だよ。」

「ええ、彼はちょっと常軌を逸して見えたわ」、と彼女は言い、セーターを頭から脱ぎ、書斎机の椅子の上に投げた。

(中略)

「私はずっと死に煩わされているわ」と彼女は言い、裸のままドアの方へぶらぶらと歩いて行った。「誰かが首を吊るか吊らないかのうちに、私は呼ばれる。あんたたちはずっと思い出し続け、アウシュヴィッツについて話す、でも私はご臨終を毎日毎日見ているわ。たくさんよ。何か他のことについて話すことが出来ないの？」

クリスティアーネは、ホロコーストに縛られ続けるダニーやカツツを疎ましく感じている。日々医師として死に直面している彼女は、ホロコーストの死に特権的地位を与える彼らに苛立ちを覚えずにはられない。別の場面でも、クリスティアーネは、かつてある少女が殺された事件とホロコーストを

同等に置いて語り、ダニーの怒りを買う。喧嘩別れを繰り返す二人だが、最終的に、事故で重傷を負ったダニーを彼女が見舞うことで、元の関係に戻る。ただし、二人の間の決定的な不協和が解消されるような真摯な対峙があるわけではない。

クリスティアーネとの間の〈死〉を巡る対話は、ホロコーストの死を他の戦争における死と並置し相対化することの是非を巡ってなされた「歴史家論争」を彷彿させる。しかし、思慮に欠けるものの医師であるがゆえに彼女の言葉には一定の説得力があり、作者シンデルの内面に浮かぶ問いを代弁しているとも考えられる。

一方の立場からの他方の立場の相対化が、対話の中で生成しては解体してゆく状況は、作品の最大の特徴としてすでに指摘されている。エリン・マクグロスリンは、「一方の人物あるいは経験が、もう一方と比較され対立させられる、一時的に意義のある二元性」が生み出されると述べて、同時に、それらのペアは固定されておらず、ある連関を作り上げては別のペアへと分離するため、あくまでも「一時的」なペアであるに過ぎない点も指摘する⁽¹⁰⁾。この〈一時的二元性 provisional duality〉は、ここで挙げた例では、被害者の子孫／加害者の子孫、ホロコーストの死／その他の死（病死、殺人事件での死）であるが、その他にも、本作では多くの登場人物が、それぞれの立場から対話を交わし、それによって、規範化されたホロコーストの社会的、集合的記憶を脱構築してゆく。

これらの対話の反復的出現と消滅にはどのような意味があるのだろうか。ロバート・イーグルストンは、第二世代のテキストについて次のように述べる。

Specifically, they ask, and offer answers about, how we might come to terms with – mourn for – the Holocaust, and how we might understand it without assimilating it (and so, *pace* Young on memorials, making it invisible). These answers are in the text and, because they represent the dynamic process of mourning, *are* the text, and so are not amenable to easy summary. (強調は原文)⁽¹¹⁾

何より、これら（訳者註：第二世代のテキスト）が問い、答えを提示しているのは、どのようにして私たちはホロコーストと折り合いを付けられるのか—どのようにしてホロコーストを悼むことが出来るのか—というこ

とであり、また私たちがどのようにホロコーストを我がものとする（そして、記念碑について語るヤングには失礼ながら、ホロコーストを不可視にする）ことなく理解することが出来るのか、ということである。これらの答えはテキストのなかにあり、そして追悼の動的なプロセスが表象されているがゆえに、テキストこそが答えなのであって、容易な要約を受け付けるものではない。

彼はテキストそのものが、第二世代にとって不在のホロコースト記憶と折り合いを付け、犠牲者を悼む動的なプロセスであると述べる。プライベートだけでユダヤ人である、と過去と割り切って付き合うことは許されるのか、一般的な死とホロコーストの死を同列化することは許されるのかと自身に問いながら、それでも過去と現在の間を調停しようとする作業そのものが、登場人物の対話の形をとってシンデルの作品の中でも生起していると言えるだろう。

3. 同一化

第二世代に関する研究の中で頻繁に指摘される現象が、犠牲者への彼らの「同一化」である。すなわち、フランスの哲学者アラン・フィンケルクロートが『想像のユダヤ人』（1980）⁽¹²⁾ で指摘したように、直接の迫害体験を持たない第二世代のユダヤ人たちが、親あるいは近親者から聞いた体験談に強く共感した結果、彼らに擬似的に同一化し、その体験があたかも自分自身の体験であるかのように語り始めるという現象である。その最たる例は、ベンヤミン・ヴィルコムルスキーと名乗る人物（のちにブルーノ・グロジャンという非ユダヤ人であることが判明する。）が、強制収容所での幼少期の実体験として書いた作品『断片』⁽¹³⁾ が、実は完全な創作であったという事件である。後の詳細な調査によると、ヴィルコムルスキーは、意図的に詐称したのではなく、自身の不幸な生い立ちへの苦悩をホロコースト被害者に重ねていった結果、自らを本当に被害者だと思い込むようになったとされる。しかしこのような極端で病的な事例は別としても、犠牲者の苦悩を想像し、何らかの苦境にある自身の現状に重ねた結果、自身がユダヤ人被害者の精神的共同体に属していると思込む現象は珍しいものではなかった。フィンケルクロート自身も、アウシュヴィッツ生還者であるポーランド系ユダヤ人を父に

持つ戦後生まれの第二世代であるが、少年時代に自身をホロコースト関係者と考えることで特権意識を感じ、それによって他の子どもたちに対して優越感を抱いていたことを告白している。

Ich erbe ein Leid, das ich nicht erfuhr. Vom Verfolgten übernahm ich die Rolle, ohne seine Unterdrückung zu erleiden. In aller Ruhe konnte ich ein außergewöhnliches Schicksal genießen. Ohne mich einer realen Gefahr auszusetzen, hatte ich das Format eines Helden. Ich brauchte nur Jude zu sein, um der Anonymität eines austauschbaren Daseins und der Platttheit eines ereignislosen Lebens zu entgehen. Natürlich war ich nicht gegen Niedergeschlagenheit gefeit, aber ich genoß gegenüber den anderen Kindern meiner Generation einen beträchtlichen Vorteil: die Möglichkeit, meine Biographie zu dramatisieren.⁽¹⁴⁾

私は自分が経験しなかった苦悩を相続した。自身は弾圧を受けることなしに、私は迫害された者から彼の役割を引き受けた。全く平静に、私は異常な運命を享受し得た。自身を現実の危険に晒すことなく、私は英雄の風格を得たのだった。交換可能な存在の匿名性や、何事も起きない人生の平凡さから逃れるために、私はただユダヤ人であればよかった。もちろん私は打ちひしがれずにいられたわけではなかった。しかし私は同世代の他の子どもたちに比べて、ある少なからぬ有利さを享受していた—すなわち自分の伝記を劇的なものにする可能性である。

もっとも、このような犠牲者や生還者への同一化の現象は、一道義的な問題は脇に置くとして—ポストメモリーという現象において避けられない事態のように思われる。すなわち体験者の証言やその記録を媒介として生じるポストメモリーは、彼らの状況に想像を巡らせることで—時的に同化することを必要とする。ホロコーストの特異性が際立つものであり、さらに当事者の死とともに体験が遠いものとなればなるほど、後から生まれた世代にとって、想像力を十全に働かせて意識的に強く追体験しなければ実感を感じ取ることすら難しいに違いない。

シンデルの『生まれ』は、この他者の記憶への同一化を創作上の戦略的な手法として用いているように思われる。すでに述べたように、作者自身やその両親の伝記的要素を共有している登場人物は多数存在する。しかし、作者

が対話や日記、書簡の形式の中で本心を吐露させたり、内的独白をさせている登場人物は、むしろ自身や両親と経歴上は対立関係にある人々である。その一人が、収容所生還者で、裁判のためにウィーンへ呼ばれるヘルマン・ゲビルティヒである。繰り返しになるが、ゲビルティヒはかつてウィーンに住んでいた弁護士の子で、両親はガス室で殺されている。エッガーの裁判での証言を依頼するためにニューヨークの彼の家を訪ねたズザンネとゲビルティヒの間の対話は、作中で最も重要な場面であり、ゲビルティヒの長いセリフが続く。共産主義者で、政治犯としてエーベンゼーに収容された父カールの生涯について話したズザンネに、ゲビルティヒは次のように答える。

„Sie haben mir das Leben eines Kommunisten erzählt, der für seine falschen Hoffnungen bezahlt hat. Ich kann nicht einmal Respekt empfinden, entschuldigen Sie schon. Mir imponiert das gar nicht, wenn jemand im Namen Stalins gegen Hitler gekämpft hat.“ (G.167)

「あなたは私にある共産主義者の人生について語ったが、彼は間違った希望のために代償を払ったのです。敬意を持つことなどできませんね、もう勘弁して頂きたい。どこかの誰かがスターリンの名においてヒトラーと戦ったとしても、感銘を覚えることなどありません。」

あらすじの解説で述べたように、共産主義者の両親を持つシンデルの分身と言えるのはズザンネの方である。しかし、作中で尚も説得を続けるズザンネに対し、シンデルはゲビルティヒの口を通して次のように語っている。

Doch die haben eben gekämpft, für eine andere Welt, möglich für eine bessere. Sie wußten, was sie riskieren. Aber wir? Mein Vater war Anwalt. Er hatte die Kanzlei in der Doblhofgasse, guter Bürgerbezirk, wie Sie wissen. Meine Mutter und er haben sich nie um Politik gekümmert, sich nie als Weltverbesserer betätigt und daher auch keinem, der nicht ihrer Meinung war, auf den Kopf geschlagen. Sie taten niemandem was zuleide. Sie haben, so gut sie konnten, das Gesetz gehalten und ansonsten ihren normalen Beitrag zur menschlichen Gesellschaft geleistet. Sie waren gute Leute, aber nicht von der Art, daß man sich vor ihnen hüten mußte. Warum hat man sie quer durch Europa

transportiert und in die Gaskammer getrieben? (G.169)

しかし彼らは、別の世界、もしかするとより良い世界のためにまさに戦ったのです。彼らは自分が何の危険を冒しているか知っていた。しかし私たちは？私の父は弁護士でした。彼はダブルホーフ小路に法律事務所を構えていました。ご存知の通り環境の良い中産階級の地区です。父と母は政治に関わったことは一度もありませんし、世界をより良くする者として活動したこともなかったのです。自分たちと意見が違ふ人の頭を殴ったこともありません。誰かに何か危害を加えたこともありませんでした。二人は出来る限り法を遵守し、その他にも市民社会に普通の貢献を果たしてきました。彼らは善良な人々で、周囲から恐れられるようなタイプではなかった。なぜ彼らはヨーロッパを横断して移送され、ガス室へ追い込まれたのでしょうか？

カールへの厳しい批判は、作者シンデルの両親ひいては戦後長く左翼活動家であった自身に対する自己批判であると取れる。作家が自身と異なる境遇にある人物像を描くことは特段珍しいことではないが、シンデルがゲビルティヒに語らせる言葉の峻烈さからは、自身が両親の記憶と向き合う際に、何度も自身に向けた問いであることが感じられる。前章で引用したイーグルストンの考察にあったように、「ホロコーストと折り合いを付ける」ためには、無辜の犠牲者の子孫と擬似的に同化し、彼らの立場からの自己の立場の批判、検証を行うことが不可避だったのではないだろうか。

同様に、作中で詳細な内面描写がなされる人物として、加害者側の第二世代に当たるコンラート・ザックスが挙げられる。ニクラス・フランクを實在のモデルとするコンラートは、父の罪過に苛まれた結果、妻の元を去り、ミュンヘンやフランクフルトの街を彷徨し、ユダヤ人への贖罪を求めてカツに面会を求め続ける。作者がコンラートを描き出す筆致は繊細で、クリスティアーネなどを描き出す際に常に付随するアイロニカルな調子はあまり見られない。

(...) er biegt nach links und nach rechts und steht vor einer Buchhandlung. In der Auslage hebräische Zeichen, ein Buch neben dem andern und jedes über Juden, jüdisches Volk, Holocaust, Israel. Da ein Davids-tern, dort ein Foto aus vergangener Zeit. In der Buchhandlung sieht

er die Inhaberin an einem Schreibtisch sitzen, schwarzes, wuscheliges Haar, davor stehen Kunden, Leute, und die lachen, halten Bücher in den Händen, die Inhaberin lacht auch. Jetzt hat sie ihn bemerkt, wie er von draußen hineinstarrt in diesen Laden, in diese Welt, ihre Augen blitzen ihn an, sie lächelt zu ihm hin, da spürt er einen scharfen Schmerz in seinen Eingeweiden, schon blickt er zu seinen Schuhspitzen hinunter, schon dreht es ihn zur Seite, (...) (G.204)

彼は左に曲がり右に曲がり、一軒の書店の前に立つ。ショーウィンドウにはヘブライ文字の書かれた本が陳列され、あの本もこの本も、あらゆる本がユダヤ人、ユダヤ民族、ホロコースト、イスラエルに関するものだった。あちらにはダビデの星、こちらには過去の写真。書店の中には女店主が机に座っているのが見える、黒くもじゃもじゃの髪で、その前には客たちがいて、人々は笑い、本を手を持ち、店主も笑う。その時彼女は彼が外から店内を、この世界をじっと見つめているのに気付いた。彼女の眼は彼を鋭く見据え、彼に微笑みかける。その時彼は内臓に鋭い痛みを感じ、即座につま先に目を落とし、身を背けた、(後略)

これは、妻の元を去り一日中ミュンヘン市街をさまようコンラートが、ユダヤ関連書籍の書店前を通りかかった時の一場面である。ユダヤ人であることが示唆される店主を取り巻く店内は「この世界」、すなわちユダヤ世界であり、コンラートはその世界の側から糾弾されているように感じる。その後、彼は娼婦を相手に過去を告白しようとする。

Er setzte sich und schwieg. Es vergingen einige Minuten. Er bemerkte, wie Angst in ihre Augen stieg, so daß er sich räusperte, ihr die Handflächen zeigte:

„Keine Augst. Ich bin der mit der Angst. Ich habe Angst.“ (G.231)

彼は腰を下ろし、黙った。数分が経った。彼は、彼女の目に不安が浮かんだことに気づき、咳払いをし、彼女に両手のひらを見せた。

「心配しなくていい。私は不安な男だ。私は不安を抱えている。」

これらの引用からは、コンラートの「不安」が看取されるが、「不安」はシンドル自身が頻繁に用いるキーワードであり、彼はしばしば、迫害される不

不安に襲われることを語っている⁽¹⁵⁾。シンデルはコンラートに象徴される加害者の子孫を理解しようとする際に、自身と共通する「不安」を見出し、そこを接点に一時的同一化を果たしているように感じられる。エヴァ・ホフマンもまた、ユダヤ人とドイツ人の第二世代に深い類似性があることを指摘し、次のようにその理由を述べている。

For after all, a child growing up against the background of horror does not yet have the imagination of cause or consequence. It does not know on what side of the historical abyss it finds itself, or who did what to whom. It only knows the weight of secrecy and silence, the frightening imaginings that fill the gap, and the intimations of a consummately dark, consummately threatening universe. Perhaps the dread was all the worse for the German children because, even without historical knowledge, they might have sensed that it was associated with the parents, embodied in them.⁽¹⁶⁾

なぜなら、結局のところ、恐怖を背景にして育つ子どもは、まだその原因と結果に対する想像力を持っていないのだ。自分が歴史の深淵のどちらの側に立っているのか、誰が誰に何をしたのか、それもわからない。子どもが知るのはただ、秘密と沈黙の重さ、隙間を埋める恐ろしい想像、そして真っ暗で、脅威に満ち満ちた宇宙がすぐそばにあることである。もしかするとドイツ人の子どもたちは、歴史的知識がなくても、それが両親と関わりがあり、両親の姿を取っていることを感じ取っていたがゆえに、より一層大きな恐怖を抱いていたかもしれない。

自身が犯していない罪に苛まれる加害者側の第二世代とどのように向き合うかは、作者にとって対峙すべき課題であったに違いない。そして彼はそこに漠然とした「不安」という共通項を見出し、それを手掛かりに可能な限り彼らの感覚を追体験しようとする。もちろんこの一時的同一化は完全な共感、同情に終始するわけではなく、コンラートとの面会を拒否するカツ、コンラートを冷笑するダニーの姿に加害者側への批判は看取される。しかし他のエピソードと異なり、コンラートの物語にのみ、救済が設定されている。すなわち、彼は父について告白記を出版し、その上で精神分析を受けることを決意する。そしてコンラートはダニーへの手紙で、その分析医はユダヤ人で

なくてはならないと述べる。文学作品という媒介を用いて過去と対峙し、ユダヤ人との対話を通じて恢復したいというコンラートの出した結論は、作家シンデル自身が本作において実行している過去との調停の方法と重なる。イリス・ヘルマンもまた、「コンラートが自身の物語を記録し始めるならば、その出自との対峙方法は加害者側でもまたユダヤ的である」(強調は原文)⁽¹⁷⁾と述べ、文字による記録がユダヤ的共同体を作り上げる接合剤であることを指摘する。コンラートの恢復には、シンデルのユダヤ的な恢復方法が重ね合わされており、そこには同一化の痕跡がはっきりと認められる。

犠牲者への安易な「同一化」は、ヴィルコムルスキー事件やフィンケルクロートの告白を引き合いに出すまでもなく批判すべきものであるが、シンデルが創作手法として行った異なる立場の者への同一化、ひいてはそれによる自己の立ち位置の再指定は、ポストメモリーとともに生きる者たちが過去と現在を宥和させるプロセスにおいて、不可避の段階と思われる。媒介された先行世代の記憶は実感の伴わない一種の欠如であり、欠如に基づいて現在の自己の同一性を打ち立てるためには、一度敢えて不確かな自己を疎外し、視座を転位させながら再び真の自己との同一化を目指す手続きが必要なのではないか。

おわりに—調停の場としての〈身体〉

登場人物間で繰り広げられる無数の「対話」、作者の経歴に照らすと対立関係にある人物への「同一化」。これらが小説『生まれ』の特徴であり、第二世代がテキストを通じて実践する過去と現在の調停のための過程であることをこれまで提示してきた。他方、この過程が動的なものであり、対話もまた〈一時的二元性〉として、生起しては解消されるものであることも指摘してきた。—そうであるならば、この物語がどこを終点としたのかは、検証すべき重要な点である。

すでに述べたように、ゲビルティヒが証言する裁判や、ダニーとクリスティアーネの恋愛関係、カツとザックスの関係等、重要と思われるストーリーの結末は決して劇的なものではない。作者が「エビログ」で描いたのは、主人公ダニーがアメリカのテレビ局ABCが制作する『戦争と記憶』というテレビシリーズの撮影のため、テレージエンシュタット強制収容所を模して作られたクロアチア東部のロケ地にエキストラとして参加した際の情景

である。そこでは、死体の人形が路上のあちこちに配置され、木製の棺桶は「イケアで購入したように」(G.349)見え、衣装係は世間話をしながらダビデの星を衣装に安全ピンで仮止めし、実際に強制収容所を体験した唯一の参加者は、囚人役は寒いからとSSを演じたがっている。シンデル研究の第一人者であるハルトムート・シュタイネケが指摘するように、ここで皮相的に示されているのは、現代においてホロコーストはキッチュとしてしか再構築出来ないという事実である⁽¹⁸⁾。

エピローグが暗示するのは、過去の真正な再生は不可能であり、滑稽な再構築になるのが限界であるという、ポストメモリー時代の記憶の不可避の前提である。しかし、それは同時に「強制収容所はこういうもの、ユダヤ人はこういうもの」という固定化したイメージを異化する作用をも持っている。陳腐化したホロコースト・イメージをイロニーによって解体しつつ、作中で印象を残すのは登場人物が感じる「寒さ」の場面である。

Es ist so kalt, wenn man sitzt und hat die Schuh im Schnee, und das Ganze noch einmal vor fünfundvierzig Jahren, aber nackte Füße oder Holzpantoffel oder Lappen und nicht neunzig Minuten, sondern einen Tag, eine Nacht und noch einen Tag. (G.352)

座って靴を雪の中に埋めていると非常に寒い、すべては四十五年前の繰り返し、しかし裸足あるいは木靴あるいはぼろ服で、九十分間ではなく、一日、一晚とさらにもう一日。

Die Lose des Lebens, wie sind sie anders verteilt, wenn einem kalt ist; in der Kälte wird die Unwirklichkeit so scharf und nahe, daß man sie glaubt und sogar annimmt als eigentlich Wirkliches, welches uns begleitet von damals nach heute. (G.353)

人生のくじ札、その配られ方は、寒さを感じる時どれほど違った形になることだろう。寒さの中では非現実が極めて鮮明で身近になるので、人はそれを信じ、それどころか当時から今日まで我々に同行している、本当に現実のものと思ひ込む。

「寒さ」は集散的に感じ得るものではなく、あくまでも個々人の感覚である。四十五年前の収容所で収容者たちが感じた寒さと、現在テレビ番組のエキス

トラとして感じる寒さは、共通の寒さでありながら残酷なほどの運命の差を見せつける。「非現実」は現在自らが演じる虚構の過去であるが、身体感覚の共通性を通じて、虚構の間接性を凌駕する直接性が束の間出現したのではないだろうか。イロニーまみれの強制収容所のセットを描いたエピローグで作者が示唆している一抹の希望はこの「寒さ」である。

「当時から今日まで我々に同行している」ものは、まさにポストメモリーに当てはまる。媒介物を間接的に経由しているポストメモリーは、ステレオタイプのホロコースト・イメージ、ユダヤ人像の影響から逃れ得ない。しかし、シンデルが本作で何重にも作り出した「対話」「同一化」は、寒さを感じる身体性と等しく、一時的であれ、強烈な直接性の磁場を生み出す装置である。シュタイネケは、本作を生還者たちの真正な語りや、真正さを装う語りに対する「断固たる対抗モデル」と呼び、シンデルが「虚構という性質が露呈したのちにショアーの真実や存在が疑問視され得ることなしに、出来事の好き勝手な利用を許すこともなしに、虚構の中でショアーとどのように関わることが出来るかを示した」⁽¹⁹⁾とする。体験の真の証言とはなりえないことは、第二世代ホロコースト文学とそこで表象されるポストメモリーの宿命である。その条件下で実感を伴う記憶のあり方を見出すために、小説「生まれ」のテキスト内部では、現在を生きる登場人物たちが、過去の記憶との終わりなき対峙を続けている。

本研究はJSPS科研費JP17K02626の助成を受けたものです。

《注》

- (1) Robert Schindel: *Gebürtig*. Der Roman. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1992. 以下G.と略記し本文中に頁数とともに記載する。
- (2) 一例としては、Thomas Freeman: *Jewish Identity and the Holocaust in Robert Schindel's „Gebürtig“*. In: *Modern Austrian Literature*, vol. 30, (1997) S.117-126が挙げられる。
- (3) オンラインジャーナルTRANSの第7号(2001)に、来日時に行われたインタビューならびに、日本在住の研究者による3本の論文が掲載されている。URL:www.inst.at/trans/7Nr/inhalt7.htm. (zuletzt gesehen am 25. 06. 2018)
- (4) Robert Eaglestone: *The Holocaust and the Postmodern*. New York (Oxford University Press) 2004, S.79ff.; Eva Hoffman: *After Such Knowledge. A Meditation on the Aftermath of the Holocaust*. London (Vintage) 2005, S.180ff. —

これらの箇所では、第二世代と先行世代の記憶の関係が、ハーシュの概念を肯定的に用いながら解説されている。

- (5) Marianne Hirsch: *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust*. New York (Columbia University Press) 2012, S.5. ハーシュはこの著書以前から〈ポストメモリー〉という概念を用いており、イーグルストンが参照したのは別の著作であったが (Marianne Hirsch: *Family Frames. Photography, Narrative and Postmemory*. London u.a. (Harvard University Press) 1997)、概念を定義した箇所として最もよく引用されるのが上記であることから、ここでもそちらを参照した。
- (6) 概略するにあたり、以下の文献を適宜参照した; Alfred Strasser: „Wien ist die schönste Stadt der Welt' sagte ein Zagreber Kostümmann zu mir, der weil er mir den Judenstern provisorisch am Mantel befestigt." - Die Darstellung der Juden im Wien der achtziger Jahre in Robert Schindels Roman *Gebürtig*. In: *GERMANICA*, vol.42, (2008) S.209-221. ここでは電子ジャーナル版を参照した。URL: <https://journals.openedition.org/germanica/532> (zuletzt gesehen am 25. 06. 2018); 土屋勝彦: ウィーンのユダヤ人—ローベルト・シンデルの『生まれついて』— [日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第28号, 1996, 151~164頁] 155~157頁。
- (7) Niklas Frank: *Der Vater. Eine Abrechnung*. München (C. Bertelsmann) 1987.
- (8) Renate Posthofen: *Erinnerte Geschichte(n): Robert Schindels Roman „Gebürtig“*. In: *Modern Austrian Literature*, vol. 27, (1994) S.193-211, hier S.204.
- (9) Vgl. Neva Šlibar: *Anschreiben gegen das Schweigen*. Robert Schindel, Ruth Klüger, die Postmoderne und Vergangenheitsbewältigung. In: *Jenseits des Diskurses. Literatur und Sprache in der Postmoderne*. Hrsg. von Albert Berger u. Gerda E. Moser. Wien (Passagen) 1994, S.335-56.; Peter Arnds: *Robert Schindel's Novel „Gebürtig“ (1992) in a Postmodern Context*. In: *Towards the Millennium*. Hrsg. v. Gerald Chapple. Tübingen (Stauffenburg) 2000, S.219-239.
- (10) Erin McGlothlin: *Second-Generation Holocaust Literature: Legacies of Survival and Perpetration*. New York u.a. (Camden House) 2006, S.93.
- (11) Eaglestone, a.a.O., S.99.
- (12) Alain Finkielkraut: *Le Juif imaginaire*. Paris (Seuil) 1980; deutsche Ausgabe; ders.: *Der eingebilddete Jude*. München, Wien (Carl Hanser) 1982. ここではドイツ語版を参照した。
- (13) Benjamin Wilkomirski: *Bruchstücke. Aus einer Kindheit 1939-1948*. Frankfurt/M. (Jüdischer Verlag) 1995. 詐称であることが指摘されたのち、出版社の依頼でシュテファン・メヒラーがヴィルコムイルスキーについて詳細な調査を行い、その結果をまとめたものが以下である: Stefan Maechler: *The Wilkomirski Affair. A Study in Biographical Truth*. tr. John E. Woods. New York

- (Schocken) 2001.
- (14) Finkielkraut, a.a.O., S.15f.
- (15) Robert Schindel: Literatur – Auskunftsbüro der Angst. Wiener Vorlesung zur Literatur. In: Gott schützt uns vor den guten Menschen. Jüdisches Gedächtnis – Auskunftsbüro der Angst. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1995, S.35-114, 特にS.59-72の“Lüste und Früste”の章で迫害妄想から来る不安について語られている。
- (16) Hoffman, a.a.O., S.123.
- (17) Iris Hermann: Ohnehin Gebürtig Andernorts: Zur Diversität von Erinnerung und Identität bei Doron Rabinovici und Robert Schindel. In: Der Nationalsozialismus und die Shoah in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur. Hrsg. v. Torben Fischer, Philipp Hammermeister u. Sven Kramer. Amsterdam (Rodopi) 2014, S.133-148, hier S.140.
- (18) Hartmut Steinecke: „nachgeboren, also spielend“: Literatur als Erinnerung in Robert Schindels Roman „Gebürtig“. In: Literatur als Erinnerung. Hrsg. v. Bodo Plachta. Tübingen (Niemeyer) 2004, S.313-323, hier S.321.
- (19) Steinecke, a.a.O., S.323.